

平成 27 年度 発達障害に関する教職員育成プログラム開発事業
成果報告書（概要版）

実施機関名（愛知教育大学）

1. テーマ

教育現場のニーズを踏まえたインクルーシブかつ負担の少ない発達障害児への支援モデルを構築し、そのモデルに基づく理解および支援法を教育現場に導入するための教職員育成プログラムの開発を行う。

2. 問題意識・提案理由

発達障害児への合理的配慮が、教育現場の教職員において過度な負担と感じられてしまう問題がある。一方でサランカ宣言では「インクルーシブな方向性を持つ通常の学校こそ、差別的な態度と戦い、友好的な地域社会を創り、インクルーシブな社会を建設し、万人のための教育を達成するためのもっとも効果的な手段である。さらに言えば、これらは、大多数の子供に効果的な教育をもたらすものであり、効率性を格段に上げ、究極的には教育システム全体のコスト削減につながる」とも明記されている。以上のことから、教育現場の教職員の意識と国際的ガイドラインとの解離を克服する方法を考えていく必要があるだろう。

本事業の提案理由は、通常の学級における特別支援教育を推進するために、教職員が発達障害児を学校や学級にインクルードしていくという意識を持ち、彼らの特性を踏まえたライフデザイン支援の在り方を、わかりやすく学ぶことができる教職員育成プログラムの開発およびその普及が必要であると考えからである。

3. 目的

本学では通常の学級における発達障害児の特別支援教育に関する教職員の専門性向上を目標とし、人材育成に携わってきた。これらの実績を基盤とし、以下6点を事業目的とした。

1. 発達障害に関する学びに関する教職員のニーズを調査し、本学における「通常の学級における特別支援教育」のカリキュラム必修化に必要な教育内容を探る。
2. 卒業・修了前教育やアクティブ・ラーニング等の実践を通し、現行の教員養成段階における大学生の学習機会およびカリキュラムの充実に向けた課題を探る。
3. 発達障害児・者の生涯発達の各ステージにおける支援を考える研究会を開催し、発達障害支援におけるタテの連携支援の充実策を検討し、教材開発につなげる。
4. 発達障害のグレーゾーンの児童生徒を適切な支援に結び付けるための入口支援に関する研究会を開催し、入口支援をサポートするための教材開発につなげる。
5. 医学と教育の有機的連携による医教連携支援の可能性について検討する研究会を開催し、その結果を踏まえて教材開発につなげる。
6. デザインや美術教育の発達障害支援への貢献可能性を探るための研究会を開催し、その結果を踏まえて教材開発につなげる。

4. 主な取組内容

1. 「通常の学級における特別支援教育」の必修化に向けたニーズ調査と取組

愛知県内の教職員 3062 名（有効回答者 2988 名）に調査を行い、通常の学級における特別支援教育に関する教職課程のカリキュラム整備に関する検討を行った。

2. 卒前・修了前教育の取組

卒前・修了前の大学生を対象として発達障害に関する専門性を目指した研修会を実施し、現行の教員養成段階における課題を検討した。

3. 発達障害ライフデザイン支援プロジェクト

多方面の専門家を招き、シンポジウムを 2 回シリーズで実施し、「タテ」の連携に関する課題や取組に関する実践知の集約と、タテの連携上の医療・福祉・教育の観点を踏まえた研究会での学びの集約を行った。

4. 発達障害の入口支援推進プロジェクト

発達障害のグレーゾーンの児童生徒に対する入口支援を適切に行うために必要な支援方法に関する講演会および調査を実施した。

5. 医教連携プロジェクト

大学病院の医師、臨床心理士の講師を招き、医教連携による発達障害児者の医療に関する研修会および調査を実施した。

6. デザインのちからプロジェクト

視覚優位の発達特性のある児童生徒に対する視覚化支援を意識したデザインの工夫に関する研究会を行い、美術教員が持つ専門性を発達障害支援領域に活かす方法について検討を行った。

7. その他の事業

学部学生と大学院生のアクティブ・ラーニングによる、発達障害の可能性のある児童生徒支援を学ぶための学習会を開催し、発達障害に関する知識や技能に関する検討を行った。

5. 主な成果

1. 「通常の学級における特別支援教育」の必修化に向けたニーズ調査と取組

調査からは、教員養成に関わる大学教育における特別支援教育のカリキュラム必修化や教科書整備の必要性が示唆された。

2. 卒前・修了前教育の取組

研修会ではユニバーサルデザインの授業を推進するための手立ての講義や実習が行われ、卒前・修了前に発達障害児の指導や学級運営に関する研修の必要性が示唆された。

3. 発達障害ライフデザイン支援プロジェクト

シンポジウムからは、小 1 プロBLEM や中 1 ギャップの予防や中高大連携の重要性等が示唆された。内容の一部は『発達障害のライフデザイン支援〔連携支援篇〕』『発達障害のライフデザイン支援〔事例篇〕』に収録し、普及を行った。

4. 発達障害の入口支援推進プロジェクト

講演会及び調査からは、支援にあたって、他者・世界との接点を支えることの必要性が教示された。内容の一部は『発達障害のライフデザイン支援〔基本篇〕』『発達

障害のライフデザイン支援〔連携支援篇〕』、『発達障害の入口支援』に収録し、普及を行った。

5. 医教連携プロジェクト

研修会および調査からは、幼少期から青年期までの一貫した指導支援の重要性が指摘された。内容の一部は『発達障害のライフデザイン支援〔連携支援篇〕』に収録し、普及を行った。

6. デザインのちからプロジェクト

研究会では視覚映像優位と聴覚言語優位の違いに基づいた工夫の重要性が指摘された。内容の一部は『発達障害のライフデザイン支援〔基本篇〕』に収録し、普及を行った。

7. その他の事業

学習会からは教員養成段階の学生における各障害の知識や対応についての学習の重要性が示唆された。内容の一部は『発達障害のライフデザイン支援〔基本篇〕』に収録し、普及を行った。

※3～7 の成果は本事業ウェブサイト (<http://www.rinsho-center.aichi-edu.ac.jp/project/>) でも普及がなされた。

6. 今後の課題と対応

平成 27 年度においては、「5. 主な成果」の 1～6 の事業及び 7. その他の事業が実施され、平成 26 年度の同事業の研究成果のエッセンスも活用しながらテキスト開発およびその成果普及の取組がなされた。

1. 「通常の学級における特別支援教育」の必修化に向けたニーズ調査では、愛知県の教職員対象に大規模調査を行い、発達障害についての学びのニーズを把握し、エビデンスに基づいたテキスト編集がなされたことは大きな成果と言える。今後の課題は、普及したテキストによる教育効果の測定である。
2. 卒前・修了前教育の取組は、平成 26 年度にも実施をしたが、今年度で 2 年目となり本学のイベントとして定着しつつある。必修化が達成されるまでの継続が課題と言える。
3. 発達障害ライフデザイン支援プロジェクトに関しては、タテの連携を中心に研究会を実施し、講演内容をテキストに収録するなどの成果普及を試みた。今後は、未だ連携が不十分である高校・大学・社会の関係の取組に課題があると言える。
4. 発達障害の入口支援推進プロジェクトについては、昨年度は課題抽出にとどまったが今年度はそれを踏まえてリーフレットの開発を試みた。今後は、活用の幅を広げるための成果普及の充実が課題と言える。
5. 医教連携プロジェクトに関しては、学生向けに医教連携の共同研究会を実施し、その成果報告会を実施した。これを基盤に教員養成系大学である本学と医学系大学である藤田保健衛生大学との学生レベルでの交流などの活発化が課題と言える。
6. デザインのちからプロジェクトについては、視覚芸術とことばの循環運動について意義のある知見を得ることができた。美術教育の特別支援教育へのますますの

貢献可能性を模索することが課題と言える。

7. 問い合わせ先

組織名：愛知教育大学

- | | |
|-------------|---|
| (1) 担当部署 | 愛知教育大学・研究推進部研究連携課
プロジェクトグループプロジェクト管理担当 |
| (2) 所在地 | 愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢 1 |
| (3) 電話番号 | 0566-26-2417 |
| (4) FAX 番号 | 0566-95-0012 |
| (5) メールアドレス | kyuichi@office.aichi-edu.ac.jp |